

# 作家と同性愛<sup>1)</sup>

—— E. M. フォースターとアンガス・ウィルソンの場合 ——

横 山 幸 三

## 1. はじめに

E. M. フォースター (1879-1970) とアンガス・ウィルソン (1913-1991) の2人は、既に故人とはなっているけれども、現代のイギリスを代表する作家であることは紛れもない事実ですし、またこの2人が実は揃って同性愛者であったということも、つとに周知のことかと思われます。本論は、2人の作家における同性愛の在り方について比較・検討の作業を行い、その特徴を浮き彫りにすることによって、従来捉えられてきた作家の人間像に再評価を与えることを、目的としています。

そこで、この2人の作家との出会いについて記すことから始めてみます。まず、E. M. フォースターですが、フル・ネームでは、Edward Morgan Forster となります。日本では、近年『眺めのいい部屋』とか『モーリス』というイギリス映画の原作者として知られるようになった作家です。若い娘さん達が、James Ivory 監督の制作になるこれらの映画を熱心に見ているとか、それ以上に、およそE. M. フォースターの作品が映画化されるということなどは、全く夢にも思わなかったことで、古くからこの作家と付き合いしてきた者からすると、正に隔世の感があると言っても過言ではありません。

実は、東京教育大学の英文科に在学中、親しい仲間が集まって読書会を開いていましたが、何回目かの当番が廻ってきた時に選んだ作家がこのE. M. フォースターで、取り上げた作品は彼の最高傑作とされる *A Passage to India* (1924) でした。その読書会がきっかけになり卒業論文で『E. M. フォースター論』を書いたわけですから、本当に長くて古い付き合いになります。当時は、フォースターといっても日本では余り知られてはいませんでしたが、わずかに吉田健一が『英国の文学』(新潮文庫)の中で紹介している程度でした。ところが肝心のフォースターはイギリス本国で出版されている英文学史の本で

は必ず言及されているという不思議な作家で、作品数の割には重要視されました。筆者が目をつけたのは正にその点で、わずかに長編小説を5作しか発表していないのに、James Joyce, D. H. Lawrence, Aldous Huxley, Virginia Woolfなど、イギリス小説の黄金時代と言われる1920年代の優れた作家達と肩を並べる扱いをされているところに着目したわけです。その目の付けどころがよかったせいか、卒業論文の出来はそんなに悪くはなかったらしく、もう少し勉強を続けてはどうかという恩師の先生方のお勧めもあって、今日に至っているという次第です。

一方、アンガス・ウィルソンとは比較的最近の付き合いです。20年程前からさる出版社で英米の短編小説のアンソロジーを編む機会が与えられて、10冊近い大学の英語教科書を出しておりますが、お陰さまで今でもかなり使われています。その仕事を通じて沢山の短編小説を読みましたが、そのなかでいかにもイギリス的と言うべきか、誠に重厚な文体で、大人の雰囲気のある作家としてアンガス・ウィルソンの名前が筆者の心に深く刻まれたのでした。その後彼の長編小説にも手を染めて、近頃は初期から中期にかけての作品を少しずつ読んでいます。決して読みやすい作家ではありませんが、一旦読み始めると中々止められないという誠に不可思議な魅力があります。加えて、つい最近のことになりますが、ウィルソンについての認識を新たにするような書物とめぐり合うことができましたので、この点についても後で詳しく触れたいと思っております。

ところで、このところアンガス・ウィルソンの作品を読む度ごとに、E.M. フォースターのことが妙に思い出されるようになりました。文章は明快でありながら、それでいて何か曖昧模糊とした感じが残るという点が共通しているのです。フォースターについては、よく“elusive”とか“baffling”などという修飾語が用いられますが、全く同じようにウィルソンについても“evasive”とか“difficult”というような形容がなされています。2人ともに、極めて知的な小説家で、批評家としても優れていることは確かですが、何となくわかりにくいというところが似ていて、読後感が大変に近く感じられるのです。恐らくは作家としての資質という点で互いに共通するところがあるのではないのでしょうか。そう思って、改めてこの2人の作家について調べているうちに、大変に興味深いことを発見いたしました。

## 2. 2人の伝記的事実

フォースターとウィルソンの2人の伝記的事実について、以下、色々な比較を試みてみることにします。

フォースターはロンドン生まれであるのに対して、ウィルソンはサセックスの田舎に生まれている。ウィルソンは早くに母親を失っているが、フォースターの方は父親を2歳足らずで失っています。2人ともに、パブリック・スクールを経て、一方はオックスフォードへ、もう一方はケンブリッジに進んでいる。興味深いのは、2人の学費はウィルソンの場合は母親の遺産で、フォースターの場合は父方の祖母の遺産によりまかなっているという点です。フォースターは大学でラテン語と歴史を、ウィルソンは中世史を学んでいる。大学を卒業後、ウィルソンは1年もしないうちに就職しますが、一方のフォースターは母親とのんびり海外旅行を楽しんでいます。2人ともに中産階級の出身でありながら、経済的な余裕という点では相当の格差があったようです。ウィルソンは働きながら、まずは短編小説を発表し、しばらくして最初の長編小説を出版したのは、彼が39歳の時でしたから、作家としてはかなり遅い出発であったと言えます。フォースターの方は、大学の講師や住み込みの家庭教師などをしていうちに、早くも26歳で処女作を発表しています。そして、立て続けに1910年までに4つの長編小説を出版しています。彼は若くして極めて順調な作家活動を展開していることがわかります。ウィルソンが筆一本で暮らせるようになるのは1955年以降ですから、作家として相当に苦労しているようです。フォースターは、彼の代表作である *A Passage to India* を1924年に出版してから、小説家としては絶筆状態に陥りました。筆者は、長いこと彼が筆を折った理由がどうしても理解できずにおりましたが、ある時それが同性愛に関係しているとわかって、目から鱗が落ちるような思いを味わったことがあります。一方、ウィルソンは、晩年近くまで作家活動を続けました。その間、イースト・アングリア大学の教授としての経歴もありますが、彼の生涯を特徴付けることとして、旅に明け暮れている感じがあります。と申しますのも日本へも2度来ていますし、大好きなアメリカには1960年以降毎年のように渡っております。

他方のフォースターも、負けず劣らずによく旅に出ています。まず、イタリアとオーストリアへ、次いでギリシア旅行。その後、エジプトにかなりの期間滞在し、インドへは3回も訪れています。こんな風に、気軽に旅ができたとい

うことは、別の言い方をすれば、家族や家庭に束縛されなかったことを意味しています。つまり、2人ともに極めて自由で気ままな生活を送っていたのではなかったのかと想像されます。事実、それぞれが住む家を頻繁に替え、若い頃はそれこそ席の暖まる暇もなく、実に頻繁にあちこちと移動しています。

このように、フォースターとウィルソンの2人の生涯を較べてみると、大変に類似点の多いことに気が付きます。肉親の死、家庭環境、受けた教育、その専門分野、旅行好き、根なし草の生活などですが、これらの伝記的事実と2人が同性愛者であったことがどう結び付くのかを、次に考えてみたいと思います。

同性愛者は、現在はいざ知らず、フォースターやウィルソンの存命中はやはり社会的に疎外された存在であったことは確かです。同性愛が社会的にタブー視されていたという現実があり、イギリスではフォースターがちょうど物心の付いたと思われる頃、すなわち、1885年には同性愛行為禁止が立法化されています。例えどんなものであれ、男性同士のわいせつ行為は2年の懲役刑に処せられました。19世紀末の代表的な作家である Oscar Wilde がこの罪に問われて投獄の憂き目にあったことは、遍く知られた出来事です。1895年のことであり、フォースターがパブリック・スクールに在学中の事件でした。従って、同性愛が社会的にどのような扱いをされるものであるかということは、フォースターには痛いほどにわかっていたことだろうと想像されるのです。実際のところ、この「同性愛行為禁止法」は、その後も長い間効力があり、1957年に、「互いに同意した成人が個人的に行なう同性愛行為はもはや無視して犯罪に問うべきではない」という趣旨の Wolfenden Report (『ウォルフエンデン報告』) が出されるまで続いたのです。この勧告の趣旨が立法化されたのは実に1967年に至ってからで、イギリスにおいては歴史的にも、社会的にも、同性愛者は“queer”などと呼ばれ、白眼視されてきたのです。

このような状況に対して、フォースターとウィルソンのともに同性愛者であった2人が、どのように振る舞ったかは興味深々たるところですが、実は全く正反対とも言うべき対応をいたしました。すなわち、一方は自分が同性愛者であることを生涯にわたってひた隠しに隠して、その作品世界にも反映しないように努めました。ですから、作品を読む限りにおいては、作者が同性愛の実践者であることは殆どわからないような書き方をしております。フォースターの場合がこれに該当いたします。他方、ウィルソンの場合には、初期の短編小説はもとより、長編小説第1作である *Hemlock and After* (1952) においてすら、明らかに作者が同性愛者であろうと推測されるような書き方をしておりま

す。誠に正直と言えば正直な書き方です。それだけでなく、彼はその後の作品においても同性愛者を続々と登場させておりますから、世評にはおかまいなしに同性愛者の実態を自由自在に描き出したのです。これは当時として、相当に勇気ある行動ではなかったかと思われます。

このように、同性愛者である2人の作家が自らの作品世界においては誠に対照的な書き方をしていることを、ここではひとまず指摘しておきます。

それでは、はたしてこの2人の作家が本当に同性愛者であったかどうかという点になりますと、実はその生前においては一般読者には殆ど知られておりませんでした。これは前述のように、当時の社会情勢からすれば当然と言えば当然至極のことであったようにも思われます。そこで、次に2人の伝記的事実についての最新情報を紹介しておきたいと思ひます。

### 3. 新しい2つの伝記

この2人の作家について、極めて詳細なる伝記が、この数年の間に相次いで出版されておりました、それぞれが従来のフォースターとウィルソンの作家像に対して大幅の修復を迫るような内容を持っていることが判明しました。

フォースターの方は、Nichola Beaumanの *Morgan: A Biography of E. M. Forster* (1993) であり、もう一方は、Margaret Drabbleの *Angus Wilson: A Biography* (1995) です。

そこでまずは、フォースターの方から見てゆくことにします。

E. M. フォースターは、1970年に91歳の長い生涯の幕を閉じましたが、生前にはその経歴について不明な点が多く、ある意味では研究者泣かせの作家でもありました。いわゆる、伝記的アプローチはできなかつたわけで、筆者が卒業論文を書いていた当時も事情は全く同じで、だからこそ作家の伝記的部分は取り上げずに、ひたすらに作品だけを論じるという方法を取らざるを得ませんでした。折から、アメリカの「ニュークリティシズム」が一世を風靡しておりましたので、これはこれでむしろ好都合であったとも言えます。と言うのも、作品は作者の手を離れた独立した存在であるという議論が当時は有力であったからなのです。ご多分に漏れず、作品中心の論をまとめることになりました。だから、こと卒業論文に限ってみれば、フォースターの生涯について問題にすることは余りなかつたのですが、その後フォースターについて考える時に、やはり彼がどのような人生を送っているのかということには少なからず関心を持た

ざるを得なかったことも確かです。英米で出版された色々な研究書に目を通していているうちに、どうやらフォースターという作家が同性愛者であるらしいことが段々とわかってきました。しかしながら、当代のイギリスを代表する作家として尊敬を集めているフォースターが、同性愛の実践者であるとはさすがに誰も明言しにくく、そのことは関係者のみの公然たる秘密だったようです。やがて、1970年にフォースターが亡くなりますと、翌年には自伝的小説とされる *Maurice* (1971) が出版されます。更に、翌1972年に同性愛をテーマとする作品を含む短編小説集 *The Life to Come and Other Stories* が刊行されて、フォースターが同性愛者であったことは、天下に周知の事実となったわけです。

ちょうどその当時、筆者は勤め先の大学から派遣されて、イギリスのロンドン大学に留学しておりましたので、このニュースの反響がいかに大きなものであったかは身をもって経験しているところです。イギリス本国でも、著名な作家が同性愛者であったという事実は、一般の人々に少なからぬ衝撃を与えたようです。実際にも、*Maurice* の巻末に付した注において、作者自らが同性愛者であることを認め、出版に至るまでの経緯を詳細に記していることから、フォースターが同性愛者であったことが公認されたという次第です。

となると、彼が一体どんな人生を送っていたのかということが、改めて興味の的となりましたし、当然のことながら、その相手が誰であったかということも話題になりました。そこで登場したのが、P. N. Furbank の伝記 *E. M. Forster: A Life* (1977) と Francis King の *E. M. Forster and His World* (1978) の2冊です。

前者は、手紙や日記など未発表の資料を駆使してまとめた正確な伝記として高く評価されましたし、後者は、簡潔ながらもフォースターの恋人達の写真を掲載して読者に生々しいイメージを伝えました。ちなみに、著者の Francis King は日本にも馴染みの作家で、実は彼自身も同性愛者であるということです。

かくて、フォースターの生涯が白日の下に曝されることになったわけですが、ひとつ何とも奇妙な現象が起きました。と言いますのは、フォースターが同性愛者であったということが周知の事実となっても、人間フォースターの評価に殆ど変化が見られなかったということです。彼が同性愛の実践者であったことが明らかにされればされるほど、むしろ逆に、フォースターという作家の魅力と評価が高まったと言っても過言ではないように思われます。いわば、フォースターの再評価が肯定的になされているのです。

次に、ウィルソンについてですが、彼は1991年に亡くなっておりませんが、その最晩年に書かれた彼の研究書があります。Averil Gardner の *Angus Wilson* (1985) がそれです。誠に奇妙なことに、この本のどこを捜しても作家が同性愛者であったという記述が見当たらないのです。後でそのことにも触れるつもりですが、ウィルソンは生前自分が同性愛者であることを決して隠しませんでした。日常的には、少なくともある時期を契機として自分が同性愛者であること（英語では“come out”と言うそうですが）を公然と認めていたにもかかわらず、作家の亡くなる6年前に出版されたこの書物には一切言及されていないのは不思議と言えば不思議なことです。恐らく、ウィルソンは自分が同性愛者であることを公式には認めさせなかったのでありましょう。この研究書の出版にあたって、同性愛の問題には触れないという条件が付いていたのかも知れません。フォースターの場合と違って、ウィルソンについては生前から彼が同性愛者であることは誰でも認めている、いわば周知の事実でしたから、これは誠に奇妙なことと言えます。或いは、晩年に彼は自伝を書きたいと言っていたということですから、それまでは全てを秘密にしておきたかったということなのかも知れません。いずれにせよ、ウィルソンについては色々不可解なところがあり、彼の私生活については今後更に明らかにされてゆくことでしょう。

#### 4. 同性愛者としての生涯

フォースターとウィルソンが同性愛者であったことは、生前、2人ともに公式には認めませんでした。その死後、フォースターの方は遺言によって同性愛をテーマとする作品の出版許可という形で明らかにしたのに対して、ウィルソンの方は後輩作家の手を借りてその事実を明らかにしてもらったということになります。

既に紹介してある最新の伝記である Nichola Beauman と Margaret Drabble の2冊には、それまでの作家像を覆すような記述が見られるので、次にその点について触れておきたいと思います。

まず、Margaret Drabble の本ですが、著者はこの本を Tony Garrett なる人物に捧げております。「はしがき」を読みますと、この人物こそ、長年にわたってウィルソンの同性愛の相手であったことがわかります。ウィルソンの生涯の大半、すなわち半世紀にも及ぶ長期間、同棲生活を送った人物です。そして、ウィルソンの最期を看取った人でもあります。著者は、Tony Garrett の

全面的な協力がなければ、この伝記を完成することはできなかつたと記していますが、確かに微に入り細を穿つ趣きの詳細なる伝記は、例えいかに才女の誉れ高い Margaret Drabble と言えども、こうした協力者なしには不可能であったに相違ありません。彼女によれば、生前ウィルソンに彼の伝記執筆の申し出をしたところ一旦は断られたが、最終的には許可されたということです。従って、ウィルソン本人の意志に沿う形で Tony Garrett は著者に協力したのでありましょう。同性愛の実践者として、これは中々勇気ある行動であったと思います。お陰で、この伝記を通じて、ウィルソンの実人生が見事に浮かび上がってまいりました。

それにしても、わずか10年前に刊行されたウィルソンの研究書には全く言及されてもいなかった彼の同性愛という性癖についての指摘は無論のこと、彼にはれっきとした恋人がいて、しかも長期間にわたって同棲生活を送っていたというような新しい事実の指摘は大変に衝撃的で、そのことだけを取り上げても、この伝記が出版された意義は大きいと思われるのです。正直なところ、筆者自身もこれらの新事実にはびっくり仰天いたしました。

次に、Nichola Beauman の本ですが、これは基本的には先行する2つの伝記、すなわち P. N. Furbank と Francis King の伝記を補うという内容となっていますが、いわば通説ともなっていることに対して、異を立てるところがあり、玄人好みの本かと思います。と言いますのは、前2者は、人間フォースターを包み隠すことなく示してくれる一方で、作家フォースターとしての側面には余り立ち入らないというところがありますが、この本は時折想像をたくましくして大胆な仮説を提示するなど、単に伝記的事実だけに終わらずに作家の内面にまで一步踏み込もうという積極的な姿勢が感じられ、一読に値するものです。つまり、作家の伝記として事実の指摘のみではなく、それを踏まえた上で作家論にもつながる内容になっているという意味において、一段と充実した評伝として読めるように思われるのです。

そこで、この優れた本の内容について、ここで若干でも触れておかねばならないでしょう。冒頭において、フォースターの父親が同性愛者であったという事実をまずは暴露いたします。新婚間もないフォースターの両親が、夫の恋人とともにフランスへ旅行したという話からこの伝記は始まるのですが、これは、先行の2つの伝記にはない事実の指摘です。ことほどさように、著者は次々とフォースターの生涯に関わる新事実を提示して、従来の作家像に対して修復を迫るのです。これは、後発の伝記作家の特権を最大限に利用した巧みな方法と

言うべきでありましょう。ともかく、一応は確立した作家像に対して、これは大掛かりなイメージ変更を求める伝記と行うことができると思います。いずれにしても、大変に挑戦的な書物が登場したものであり、作家として、また人間としてのフォスターに対する我々読者の興味を、更に一層かき立ててくれる大変に刺激的な読み物です。従って、この本のそれこそ至るところに、新事実の指摘や既成の事実に対する新しい解釈が充ち満ちているわけですが、それらをここで一々紹介することも紙幅の関係でできませんから、筆者にとって最もショッキングであった出来事の一つだけ紹介しておきたいと思います。

フォスターの長い経歴のなかで、彼は1921年に2度目のインド訪問を果たします。最初のインド訪問は1912年のことで、これはインド人貴族がかつての教え子であるマスードという青年に会うことが主な目的でした。

彼はフォスターの人生のなかで最も親密な友情関係にあった人で、それが証拠にフォスターの最大傑作とされている『インドへの道』は、このマスードに献じられていることを思い起こせば明らかです。そして今度は、最初のインド訪問の際に紹介されたデワスの王様から、国家秘書として招かれたのです。この時の体験については、約30年後の1953年に『デビの丘』という本、ちなみにこれは最近日本語に翻訳されておりますので、フォスターがインドでどのような体験をしたかということはこの本を通じて、ある程度までは窺い知ることができるわけです。しかしながら、フォスターという人は中々に用心深いところがあって、容易には本心を明かしてはくれませんが、この時のこともそうで、表面的には6か月足らずで辞職することになった理由を2つあげているのですが、どうもそれ以外にも、そして、それが最大の理由となっているようですが、あったようです。2つの理由というのは、国家秘書という仕事が曖昧であるばかりでなく、彼にはその仕事自体が不向きであったということと、周囲に美というものが欠如していてとても耐えられないというのです。後者の理由は、いかにも文学者らしい説明ですが、どうにも説得力に欠けているように思われます。いずれにせよ、フォスターはこのデワスでの仕事を早々に切り上げるわけですが、Beaumanによれば、本当の理由はかれの同性愛によるものであるということです。すなわち、フォスターに同性愛の性癖があることを知った王様が彼に Kanaya という若い床屋をその相手としてあてがったというのです。そして、この若者との性的行為が彼にとって大変苦痛に感じられた時に、フォスターは辞職を決意したのです。勿論、フォスターの性癖はやがて大きな噂となって、自分の雇い主であるデワスの王様の権威を著しく傷付

けることにもなりかねないとの配慮も、当然のことながら働いたものと思われ  
ます。ともかく、この“Kanaya Episode”と名付けられた出来事は、先行の研  
究書には記述されていないことで、筆者などには誠に衝撃的な伝記的事実でし  
た。

それではどうしてそのような事実が発見されたかといいますと、ひとつには  
フォスター自身が書き残したメモによって確認されたからです。彼には未公  
開の日記や手紙が数多くあって、それらを通じて色々なことが確かめられてい  
ます。この場合は、インドについて書かれた本のなかで、フォスターにはデ  
ワスの王様公認の同性愛の相手がいたことは間違いないところだが、彼にとっ  
ては必ずしも幸せだったとは言えないと明記されているという傍証もありま  
す。いずれにしても、単なる憶測の類いではなくて、関係者や残された各種の  
資料から、この新事実を我々は認めないわけにはゆかないだろうと思います。

フォスターは生前自らが同性愛者であることをひた隠しに隠していたとい  
うことは、既述の通りですが、日記や手紙のみならずメモの類いまでも概ね処  
分せずに残しておいたということが普通ではないと思われま。デワスの王  
様に、自分は女性には全く興味がないと告白した結果として、上記の“Kanaya  
Episode”が生まれたわけですが、そしてその事実を後年第三者にもわかるよ  
うな形でメモとして残しておいたという事実、筆者はフォスターの面目躍  
如たるところを見ているつもりです。それは、同性愛をテーマとする自伝的な  
長編小説や短編作品を死後において出版するようにと遺言で指示しておいた  
という事実ともつながるように思えるのです。つまり、一言で表現すれば、それ  
はフォスターの人間としての誠実さということになるかと思えます。生前に  
おいては、作家として同性愛をテーマとする作品は種々の事情で発表できな  
かったけれども、自らが同性愛者であることは潔く認めて、その死後、デワス  
の場合はメモという形で、作品としては出版という形で、それぞれに明らかに  
したという事実を、筆者は彼の人間の誠実さと捉えているのです。実際にも、  
彼の死後に刊行された追悼文や色々な思い出の記などを読むと、フォスター  
という作家は日頃から大きな尊敬を集めていたばかりでなく、人間として敬愛  
的であったことがわかります。人生の達人として、周囲の人間の知恵袋とし  
て、崇められていたことを知ります。実際のところ、彼はしばしば‘the sage’  
とか‘the saint’と呼ばれていたようです。そんな人間の一面を偲ばせる逸話  
を紹介しておきたいと思いますが、その話に入る前に済ませておかなければな  
らないことがあります。

## 5. フォースターの恋人達

それは、先程の Kanaya を含めて、フォースターには一生の間に、一体何人位の恋人がいたのか、またどんなタイプの人達であったのかという問題です。現時点で筆者が承知しているフォースターの恋人達は5人おります。そのなかで、明らかにプラトニック・ラブに終わった相手が2人いて、最初が H. O. Meredith というケンブリッジ大学時代の先輩です。作家の死後に出版された *Maurice* (1971) という作品に登場する Clive Durham という人物のモデルとされています。ちなみに、この自伝的小説の主人公は Maurice Hall という青年で、学生時代にプラトニック・ラブの関係になりますが、Clive は卒業後、故郷に帰って結婚してしまい、一方の主人公である Maurice は Clive の屋敷で働く森番の Alec Scudder と結ばれるというストーリーです。この小説は、同性愛というテーマの故に大いに話題となりましたが、その出来栄えからすると二流の作品というのが定説となっており、既に一流作家としての評価が定まっているのに、何故にわざわざ評判を落とすことにもなりかねないこのような作品を死後とは言え発表させたのかという議論が巻き起りましたが、それも先程の人間としての誠実さという観点から考えれば、ある程度納得のできる事かと思われるのです。いずれにしても、この Meredith がフォースターの最初の恋人であったことは、間違いない事実のようです。次の恋人が、先にも触れましたインド人貴族の Syed Ross Masood です。フォースターは彼をインドに再三訪ねておりますし、親密な友情関係は続いたものの、結局のところはプラトニック・ラブに終わり、真の意味での同性愛は、フォースターが国際赤十字の仕事でエジプトのアレクサンドリに滞在中に知合った市電の運転手である Mohammed el Adl という青年との間で結ばれます。1916年のことでした。合計3年間に亘るアレクサンドリア滞在中に、この2人がどれほど親密な関係であったかは必ずしも明らかではありません。と言いますのも、ひとつにはこの青年がやがて結婚してしまったことと彼のエジプトでの任務が終了してしまったことのために2人の関係は中斷を余儀なくさせられたからです。それでも後に、フォースターがインドを訪問した際には、わざわざこの青年をインドまで呼び寄せたりもしておりますが、その後このエジプト青年が早死したために、中斷がそのまま終焉ということになります。その次がインド時代の Kanaya ですが、この件については繰り返しもなるので、割愛します。

最後に、最大の恋人が、1929年に出会った Bob Buckingham という、当時はロンドン在勤の警官でした。彼は、知的な向上心があって、しかも律儀な性格の持ち主であったので、父親のような年配のフォースターからまるで息子のよう可愛がられました。ところが、エジプト青年の時と全く同じように、彼もまた結婚してしまうのです。フォースターは、大変に寂しい思いをしながらも、この若い夫婦の生活上の援助をしてやり、彼が警官としての定年に達した時には、保護監察官の資格を得るための手助けをするなど、何くれとなく面倒をみてやるのです。この辺りは、尋常ではありません。

エジプト青年、インド時代の床屋、そして警察官と、フォースターの同性愛の相手は、階級的には皆労働者であることが特徴です。これは、同性愛の相手としては知的中産階級の出身者よりも後腐れがないという理由であったからのように思われます。また、どうやらマゾ的な傾向もあったようで、そのことを裏付ける本人の発言も残っております。

インド時代の Kanaya については不明ですが、それ以外の恋人達、すなわち、Meredith, Masood, Adl そして Bob Buckingham はいずれ劣らず、体格の立派な、明るい雰囲気を持つ美男子揃いであることが特徴です。フォースター自身は、小柄でなよなよとした女性的な感じの人ですから、このような組合せはペアとしてお似合いであったのかも知れません。

ともかく、フォースターはこの Bob Buckingham と終生に亘る契りを結びます。彼の同性愛の相手は、例外なく bisexual であったことが確認されています。エジプト時代の恋人が結婚し、相手の女性との間に子供ができると、フォースターはその子供の名付け親にと頼まれて、Morgan と命名するのですが、Bob と May (彼の奥さんの名前ですが) の 2 人の間に生まれた子供にも同じく、まるで自分の分身であるかのように Morgan という名前を付けています。この辺りの感覚は、筆者などにはいささか理解に苦しむところですが、確かな証言もあり事実と思われまふ。

フォースターの死後、彼の作家としての業績を讃えると同時に、その人柄を偲ぶ記念論集が幾つも刊行されました。一々取り上げませんが、かなりの数に上ります。これはひとえにフォースターという作家が人々からいかに敬愛されていたかという立派な証拠になるだろうと思いますが、実に数多くの追悼文が書かれました。著名な批評家や優れた学者の文章に混じって、Bob Buckingham の奥さんである May の書いた "Some Reminiscences" というタイトルの回想記がありますので、作家の人柄を特に偲ばせる資料として、ここに引用してお

きます。

I first met Morgan in his flat in Brunswick Square in 1931 and was with him when he died in our house in Coventry in 1970.

Over the years our relationship changed and developed, passing through many stormy passages to a close, loving understanding.

To him I owe a great debt of gratitude. For his widening of horizons by meeting his friends, by travel, but mostly by his talk. I am by nature bossy, as he claimed all women are, especially nurses. He helped me to realise this and try to be less so. I was then a 23 year old night sister in a maternity hospital knowing almost nothing outside nursing.

I now know that he was in love with Robert and therefore critical and jealous of me and our early years were very stormy, mostly because he had not the faintest idea of the pattern of our lives and was determined that Robert should not be gulped in domesticity.

Over the years he changed us both and he and I came to love one another, able to share the joys and sorrows that came.<sup>21</sup>

ここには、筆者と作家との間における長年に亘る深い交流が誠に素直な筆で表現されています。この手記によれば、夫婦の間に生まれた自分達の子供の名前ばかりでなく、孫にも Morgan と命名したとは、大変な驚きですが、ことほどさようにこの一家からフォスターは敬愛されていたことがわかります。無論、ここにも記されているように、そこに至るまでには大きな山や谷があったであろうことは想像に難くありませんが、ともかくも作家は晩年を迎えて、静かで幸福な心境を味わうことができたようです。

この一文に関連して最も大事なところは、「生の継続性」という問題ではないでしょうか。同性愛による生殖機能の放棄の結果として生じる 'sterility' (「不毛」)の問題です。つまり、生の断絶という形の、いわば「人間性の否定」にも繋がるこの問題は、同性愛者にとっては容易に乗り越えることのできない壁となって立ちはだかるのですが、例え生身の人間という形でなくとも、この場合にみられるように、Morgan という名前が将来に向かって受け継がれてゆくということは、フォスターにとって何より大きなプレゼントであったに違

いないのです。実際にも、フォースターは健康の衰えた最晩年には、この Buckingham 夫妻の手厚い看護を受けて、彼らの住んでいた Coventry の自宅で安らかに息を引き取ります。長年一緒に暮らしてきた母親を1945年に失い、それ以後はケンブリッジ大学キングス・コレッジで孤獨な生活を送ってきたフォースターは、最期にこうして幸せなその生涯の幕を閉じたのです。

## 6. ウィルソンの恋人達

今度は、アンガス・ウィルソンの場合を眺めて見ることにします。

全部で、3人いたようです。初めの Bentley Bridgewater という人とは、ウィルソンが亡くなるまで関係が続いたということでもないようですが、一時期は同性愛の相手として、その後は親しい友人としての付き合いだったようです。次の Ian Calder とは、かなり長く続いたようですが、最後の恋人である Tony Garrett の登場によって影が薄くなり、1959年における彼の結婚によって、ついに2人の関係にはピリオドが打たれるのです。

1945年以来、平行して続いていた関係はこうして一本化されるわけですが、この Tonyこそウィルソンの、いわば、終生の伴侶となります。性的な関係は言うまでもなく、日常生活万端に至るまで、ウィルソンは彼の存在なしには一日たりとも生きてゆけない有様だったようです。ウィルソンが外出する時には運転手として、家庭においては料理その他、また、例えば講演をしたり、各種のインタビューを受けたりというような時には、極めて有能な秘書として不可欠の存在だったようです。Tony という人物は、自分の一生をただひらにウィルソンのために捧げたということが、作家の死後ようやくのこと Margaret Drabble の伝記によって明らかにされたのです。その生涯にわたる献身振りは正しく驚異的と言っても過言ではありません。唯々感心するばかりで、普通の異性同士の結婚でも、これほどまでに緊密で愛情に満ちた関係は、極めて稀であると言っても良いかも知れません。

ですから、ウィルソンは特に1960年以降殆ど毎年のように行なったアメリカでの講演旅行を初め、それ以外の多岐にわたる目的の旅行には、常にこの Tony を伴って出掛けたのです。彼がいなければ、ウィルソンは旅行ひとつできなかつたというのがむしろ実情であったように思われます。ともかくも、ウィルソンの場合は Tony Garrett という人物と一心同体であったという類い稀な同性愛関係であったということが出来るでしょう。ウィルソンが Tony との同性愛関

係に入った当初は、イギリスにおいて同性愛が未だ市民権を得ていたわけではありませんが、当然のことながら人々からは白い目で見られることが多かったに違いありません。生涯ひた隠しに隠したフォースターと違って、ウィルソンは何事にもオープンでしたから、自らの性癖をひたすらに隠すというようなことはしなかったようで、世間の批判にはむしろ迎え打って出るというところがあったようです。

同性愛が市民権を獲得するまでの第一歩ともなった出来事、すなわち先にも紹介した『ウォルフェンデン報告』が出された1957年に、実はフォースターとウィルソンの2人は出会っているのです。新進作家が老大家を訪ね、インタビューするという企画の一環として、ウィルソンはフォースターをケンブリッジのキングス・コレッジの彼の部屋に訪問しています。このウィルソンの訪問という事実とインタビューの内容については、これまでも公表されておりましたが、この時ウィルソンはTonyを陪席させるために自分の助手という名目で同行しているのです。そのことは一切伏せられておりました。この度の伝記の刊行によって、はじめて明らかにされた事実ですが、これもTonyという生き証人がいたからこそその貴重な伝記的事実の指摘であると思われる。さすがに慮慮してか、著者のDrabbleは詳細について一切触れてはおりませんが、フォースターもウィルソンのこうした挑発的な態度にはさぞかし辟易したものかと思われる。一体にウィルソンにはそういうところがあります。

つまり、直情径行という側面があって、周囲としばしばトラブルを起こすのです。大変に子供染みたところがあって、よく言えば純粹、悪く言えば小児的というところがあったようです。Drabbleの伝記によって、我々読者はアンガス・ウィルソンの人間的側面の多くを知ることができるようになりました。現実のアンガスは、重厚な作風の作家ウィルソンとは違って、かんしゃく持ちで激高しやすい性格であったようで、全くイメージが異なります。幼い頃は、道化者でひょうきん、物まね上手で泣き虫だったそうですし、孤独で傷つき易い少年でした。長じて、率直ではあるが、社会的慣習にとらわれない人間となり、時に偏執狂の傾向を見せることもあったようです。従って、このように我儘の限りを尽くしたように思われる人物と半世紀近くも一緒に暮らすことのできた本当に良き理解者があったからこそ、作家ウィルソンの存在が可能となったということになるのでありましょう。

## 7. ウィルソンのフォースター批判

1957年に行なわれたウィルソンのフォースターに対するインタビュー記事の前文に次のような文章が記されています。

People have suggested likeness very flattering to me between our writings. In my own view, there are none as far as writing and the milieux portrayed are concerned. I know, however, that what I think to be E. M. F.'s ethic has influenced me enormously both directly and by reaction. Indeed a great deal of what I have written has been an attempt to soften the rigours of what I feel to be his Calvinism, perhaps by knocking some of his saints on the head and by liberating some of his dammed. Nevertheless, for those who read aright my final sympathies are with his hierachy. This interview then must be read as a personal gratification of my own concerns with E.M.F.'s work ; its illuminations and its failures to illuminate are equally the product of my obsessed approach.<sup>3)</sup>

ここには、先輩作家に対する敬意が満ちており、この時点におけるウィルソンの素直な気持ちが読み取れるような気がします。

ところが、年を経るごとにこうしたウィルソンのフォースターに対する考え方や態度に変化が生じてきます。やがて、同性愛に対するフォースターの取った姿勢に関して批判的になってゆきます。それは、彼が生前自らを同性愛者として公式には認めなかったこと、とりわけて、フォースターが同性愛をテーマとする作品を発表しなかったことに対して、大いなる不満を表明したということです。こうしたウィルソンの意見表明は、フォースターの死後、Furbankの伝記が刊行され、その内容について、*Gay News* という同性愛者の機関誌のインタビューに答えた批判でした。1976年にも同じ雑誌の書評欄で、フォースター攻撃を繰り返すのです。どうやら、ウィルソンには生前におけるフォースターの同性愛に対する姿勢に我慢がならなかったようです。同性愛者をテーマとする作品を数多く残している自分と引き較べてみて、同性愛者でありながら、自らの体験を踏まえた作品を何故書かなかったのかという不満と思われれます。

いかにも、ウィルソンらしい直截的な物の考え方であり、率直な発言であるとは思いますが、フォースターにはフォースターなりの考え方があったことでしょうから、一方的な判断は避けねばならないでしょう。

いずれにしても、フォースターとウィルソンの2人の間には同性愛をめぐる、考え方や態度の違いが認められます。ウィルソンの主張するように、フォースターは自ら同性愛者であることを公言し、その経験を作品化しようと思えばできたかも知れないのです。なのに、何故にそうしなかったかということは、中々難しい問題かもしれませんが、筆者は次のように考えております。

それは、まず、2人の作家を取り巻く環境の違いにあると思いますし、またそれぞれが同性愛を自覚して実践した時期の違い、そして究極的には作家としての資質の違いにあると思うのです。

本論の冒頭でも記したように、フォースターが生まれ育った時代においては、同性愛が社会的にタブー視されていたということが重大かと考えています。彼の父親が同性愛者であったという指摘がなされておりますが、2歳足らずの時に亡くなっています。彼の周辺を女性達を取り巻いていたという幼・少年時代には、身近に同性愛を実践するような男性は、皆無でした。大学時代によく男性との交際が始まりましたが、プラトニック・ラブの域を出ませんでした。ようやく肉体的交渉を持つに至るのは、彼が単身でエジプトに滞在中のことであります。その時点では、フォースターは押しも押されぬ新進作家として活動しているのです。ところが、フォースターの作家としての不幸は、自らの同性愛認識が執筆活動の足枷となってしまったことです。それでも彼は、14年の歳月をかけて最終作を完成しますが、残念ながらそれ以降、作品を書くことができなくなります。もし書くとしても、自らの性癖である同性愛のことを避けて通ることは絶対にできないからなのです。長くて深い苦悶の末に、フォースターは作家として沈黙を選んだというわけです。

一方のウィルソンの場合には、事情が大きく変わります。彼は、6人兄弟の末子として生まれましたが、両親を早く失い、年長の兄の世話になっています。2人の兄が同性愛者であることが確認されておりますから、幼い頃から男性同士の親しい関係にはさほどに違和感はなかったと想像されます。ウィルソンは、経済的には余り恵まれておりませんでしたから、大学卒業後直ちに社会に出て働かねばなりません。ですから、作家としての出発は比較的遅く、既に複数の男性と同性愛関係に入っておりました。ですから、彼の作品には初期の頃から作品に同性愛者が登場します。ウィルソンにとっては、同性愛をテーマ

とする処女作を発表することには何のためらいもなかったはずで、時代も同性愛に対して、寛容になりつつあったと思われる証拠に、彼の処女作の発表と前後して、現代のイギリスを代表する女流作家の Iris Murdoch の初期の傑作 *The Bell* (1958) が世に迎えられ、ベスト・セラーとなりました。良く知られているように、この作品のテーマのひとつが同性愛です。

そういうわけですから、2人の作家が同性愛に対してどう対処したかということは明らかに環境の違い、そしてその後の事情の違いにあるように思われるのですが、究極的には、やはり2人の資質の違いにあることは間違いないところでしょう。

自らの背負ったオブセッションとどう付き合うのかは、それぞれの持って生まれた資質の決めることであろうと思います。フォースターの場合は、内向的で受け身の姿勢。ウィルソンの場合は、行動的で開けっ広げの性格。それぞれの人間の持味が、作家としての活動を支配する。フォースターはフォースターらしい作家活動をしたと思われるし、ウィルソンはウィルソンのような行動様式を取ったことが、それぞれの伝記を通じて我々読者に伝わってくるような気がするのです。

ウィルソンは、その生涯を養老院で寂しく終えます。人生のパートナーであった男性、Tony Garrett に最期を看取られながらのことでありましたが、彼の晩年は栄光の果ての悲惨という感じです。その点で、フォースターとは、全く対照的な人生の幕切れでした。この2人の作家について考える時に、人間として、作家として果たしてどちらが幸せであったのかは一概に決められる問題ではありません。

作家は彼の残した作品によって評価されますが、作家がどのような人生を送ったのかということが多少でもわかると、その読み方にも微妙な変化が生じるのではないかと思います。

## 8. 結び

本論は、E. M. Forster と Angus Wilson という2人のイギリス小説家の同性愛に見られる様々な問題を考察してみました。筆者自身の関心は、現代のイギリス小説の研究ですが、基本的には「イギリス小説とは何か」という問題です。これは中々答えが出しにくい大きな命題ですが、そのアプローチのひとつとして、実は「イギリス小説における学者小説家の系譜」というテーマを設定

しております。

学者小説家は、英語では 'scholar-novelist' とか 'campus-writer' というようですが、その系譜となると、現役の Malcolm Bradbury や David Lodge、そして既にその名前を言及してある Margaret Drabble や Iris Murdoch のような作家から溯って、Angus Wilson を経た上で、最終的には、E. M. Forster へと辿り着きます。ですから、筆者の設定したテーマは、逆に本論がその出発点になるのかと思われるのです。その意味からすれば、次の課題はこれらの「学者小説家」と呼ばれる作家たちの流れを概観することかも知れません。それは次の機会に譲ることにして、今回はひとまずここで筆を措くことにします。

— Notes —

- 1) 本論は、大塚英語教育研究会例会（1999年10月9日、筑波大学学校教育部会議室）における講演原稿を基に、加筆・修正を行なったものであることを付記する。
- 2) G. K. Das and John Beer (eds.), *E. M. Forster: A Human Exploration* (London: Macmillan, 1979) p. 183.
- 3) Angus Wilson, "A Conversation with E.M.Forster" in J. H. Stape (ed.), *E. M. Forster* (London: St. Martin's Press, 1993) p. 31.